

●伝統的絣織り布Ⅱ「モノ」を視点に、それらが生み出す人間関係・社会関係を照射、「作り・売る人」「買い・使う人」が織りなす多重で多層な関係の束に迫る野心的著作。

ものづくりの人類学

—インドネシア・スンバ島の布織る村の生活誌

田口理恵 著

●目次

はじめに 地図

序章 モノから見る「社会」

- 1 モノ研究と「布 Cloth」という課題 / 2 フィールドワーク / 3 検討課題と本書の構成

第一章 スンバ島とその社会的環境変化

- 1 東インドネシアのなかのスンバ島 / 2 九〇年代の東スンバ島の状況

第二章 在来製布技術の特徴

- 1 手織機と身体運動 / 2 在来技術による布作りの工程

第三章 二つの世界をつなぐ布

- 1 スンバ島における布の利用と社会的身体 / 2 売られていく布の行方 / 3 売る布と贈る布

第四章 「布を織る村」の変貌

- 1 家屋と祭祀集団 / 2 集落 P の変遷 / 3 「大きな家」と「小さな家」の相互関係

第五章 日常生活の諸局面

- 1 日々の活動と変化 / 2 共同の機会 / 3 「世帯」と「家族」

第六章 暮らしを支える布作り

- 1 布作りと労働交換 / 2 織り出される「世帯」間の関係 / 3 家内工業と家内的領域

終章 原始機のパラドクス

- 1 原始機のパラドクスとその意義 / 2 ものづくりと地域社会

参考文献

索引

これまでの文化人類学的研究やインドネシア・テキスタイル研究では、モノから、それを創り出した過去の文明や、個別民族集団の文化・社会を論じてきた。その流れのなかでは、スンバ島の布は、布作りの技術、布を作る人々、彼らの暮らしの場が一つにおさまった、閉じた文化内の世界を読み解く手段として扱われてきた。本書では、モノから「モノを作る人」を見るような従来の方法的視点を逆転させ、「モノがつくる人の関係」に注目し、そこから産地社会の今日的状況を問い直していきたい。この「モノがつくる人の関係」という観点は、文化人類学のなかでモノを扱ってきた分野、つまり物質文化研究の伝統を再考した上で、モノを新たに扱いだした新しい研究動向とその方法論に依拠するものである。本書では、従来の物質文化研究と区別するために、筆者の依拠する後者の研究動向をモノ研究と呼び、そこで扱われる物質文化をモノと呼ぶ。そして本書では、モノ研究の立場から、スンバ島の布と、モノとしての布を介して展開される人間の様々な交渉や相互行為を丹念に記述していく。布が媒介する様々な人の関係の記述を通して、スンバ島東部の、布作りが盛んな一集落を舞台に、その場所に、様々な社会的関係が累積されてきた過程を明らかにし、そこで暮らすことの意味を検討する。「はじめに」より

体裁

・ A5判・上製・カバー
・ 四二四頁

定価

・ 八四〇〇円
(本体価格/税別)

発行所 風響社

114-0014 東京都北区田端四一四一九
電話〇三(三八二八)九二四九
http://www.fukyo.co.jp

注 文 書

流通センター
取扱品
出版
地方

発売

風響社

TEL: 03-3828-9249

本体

八四〇〇円

部

田口理恵 著

ものづくりの人類学

インドネシア・スンバ島の布織る村の生活誌

ISBN4-89489-012-7 C3039 ¥8400E

{お客様控え}

ご氏名

ご住所

お電話

月 日